

# 司馬遼太郎へのリスペクトと『るろうに剣心』

和月伸宏（漫画家）

幕末動乱の京都。維新志士最強の剣客として暗躍した「人斬り抜刀斎」こと緋村剣心。不殺の誓いを立て、流浪人となり、贖罪の答えを探す剣心の戦いを描く『るろうに剣心—明治剣客浪漫譚—』が、新たな展開に突入している。その作者が、司馬作品から受けた衝撃と自身の創作とのつながりを語る。

最初に司馬遼太郎先生の作品を読んだのは、二二歳で漫画家としてスタートした直後のことです。

僕のデビュー作は『戦国の三日月』という戦国時代の時代劇（週刊少年ジャンプ Spring Special）掲載、一九九二）でしたが、なんとか好評を得ることができまして、当時の担当さんから「少年漫画ではあまりウケないと言われる時代劇作品で人気が出たのだから、次も時代劇にしよう」と提案されました。それも、一話完結ではなくて、人気が出たら長いスパンで連載

が続けられるようなものにとしようと。

それで、幕末から明治あたりに目星をつけて、資料を探し始めました。当時、アシスタント時代からの知り合いで、新撰組（司馬作品では「新選組」と表記）の大ファンだった先輩がいます。何か参考になる作品はないかと訊いてみると、「これを読め。絶対に面白いから」と司馬先生の『燃えよ剣』を紹介されました。さっそく読んでみると、「すげえ面白えじゃん！」と、一気にハマってしまったのです。

## 時代ものの観念を覆す司馬作品

それまでは、時代小説といえば、ちよつと堅い印象だったり、テレビの時代劇のような人情物一辺倒といったイメージをもっていたりしました。ところが、『燃えよ剣』は「少年漫画っぽい」というと変ですが、血湧き肉躍る描写がありながら、『水戸黄門』的な勧善懲悪とも違う人間のドラマにあふれている。土方歳三という凄まじい男の人生が、最後まで見事に描かれていくわけです。「時代小説って、こんな面白いのか！」と初めて思い知らされ、自分もついていた印象が一気に変わりました。

そのころ、近所の古書店で、時代小説が一冊五〇円くらいでたくさん売られていまして、お金もなかったから、柴田錬三郎先生の『眠狂四郎』をはじめ、池波正太郎先生の『鬼平犯科帳』や『剣客商売』など、いろいろなものを買っては読み込んでいました。そうした作品の中でも、司馬先生の『燃えよ剣』は文章も時代小説っぽくなく、読みやすく、スラリスラリと作品の世界に入っていたのです。司馬先生がもともと新聞記者でいらしたからか、わかりやすさや伝わりやすさを意識していたのかと思っ

## 史実と物語の整合性を、どうつけるか

『るろうに剣心』（以下『剣心』）では、歴史上実在した組織や人物が要素所に出てきます。でも、自分が心がけているのは、「調べたうえで、あえて嘘をつく」ということです。人物や事件を調べていく中で、「本当はそうだったのかもしれないけど、こうしたほうが面白いな」ということがあったら、迷わず「エンターテインメントとしての面白さ」を優先するという方針です。

例えば『剣心』では、大久保利通を、瀬田宗次郎（敵側集団「十本刀」の剣士）が殺してしまいましたが、史実としてはありえないわけですが、そういう話にしてしまおう。ただし、それで終わりではなくて、そのあとで襲撃に来た平士族らに「俺たちが殺した」と言わせて、歴史に対する物語としての整合性をつける。

漫画でも小説でも、作家というものは、歴史年表を書いているわけではないし、学術論文を書いていくわけでもなく、あくまで物語とキャラクターを描いているわけです。もちろん、きちんと調べたうえでですが、「こつちのほうが面白い」と思ったら、あえて「嘘」をつく。自分が漫画を描く以上、ちゃんと読者に楽しん



馬車に乗り込み、大久保利通を襲撃する瀬田宗次郎 「るろうに剣心—明治剣客浪漫譚—」ジャンプ コミックス巻之七より

## ビフォア・アフターを分岐する力

今や司馬先生が描いた土方歳三が、「ザ・土方」と言っているほどのイメージになっていて、漫画や小説、映像作品などで描かれる土方歳三は、そのほとんどが司馬作品の影響を受けています。でも、それはあくまで司馬先生が作り上げた土方像であって、実際の土方とは違うところもあるはずですよ。

あの土方歳三は、司馬先生が、新撰組の戦闘者として、信念を曲げない男として「これが格好いい男なんだ」と描いたものであって、本当の土方がそうだったかといえば、それはわかりません。「面白い」「魅力的」「格好いい」「人が惚れる」……そんなふうには人の気持ちを引きつけるために、作家はあえて「嘘をつく」わけですよ。なるべく歴史との整合性、史実を踏まえたうえで、虚実入り交ぜながら、いかに魅力的な人物像や物語を作っていくか、ということですよ。

もつと言うと、作品を読んだ読者にとって、そのビフォアとアフターで登場人物に対しての印象が変わってくれたら、それこそ作家としての「誉れ」です。坂本龍馬も土方も、司馬先生が作り上げた人物像が今でも生きています（司馬作品ではおもに「竜馬」と表記）。

この続きは本誌でござい！